

夢のかけはし

ウミガメのふる里を 守り続ける



昭和29年生まれ。本業は大工で48年の大ベテラン。趣味はレコード鑑賞で、大好きなビールを飲みながら一日の疲れを癒す。右手には産卵確認に使う自作の探索棒を常備。高須町に妻と2人で暮らす。(65歳)

日本には毎年数千頭のウミガメが上陸し産卵しますが、その半数以上が県内といわれています。市内に上陸が確認されているのはほとんどがアカウミガメ。昨年は8頭が上陸し、そのうち2頭が162個の卵を産み、85頭の子ガメが高須の砂浜から海へと帰っていきました。ウミガメ保護監視員の主な役割は、ウミガメの産卵の確認、保護、卵の保護施設「カメのゆりかご」の監視、自然環境の保全です。

なかでも産卵の確認と卵の保護は、最も重要な任務です。ウミガメが上陸した形跡がないか、浜田から高須までの海岸線約3kmを毎朝5時から1時間ほどかけて監視します。5月から8月末まで、雨の日も風の日も天候に関係なく、毎日欠かさずことなく行いますが、特に5月の初めは気温が上がらず寒い日が多いため、根気が必要です。産卵を確認するためには、上陸した形跡を見落とさないよう砂浜にしっと目を凝らして探すことが大事です。ウミガメは砂浜に直径20cm深さ50cmほどの穴を掘って、ピンポン球ほどの卵を一度に120個くらい産卵します。形跡をたどり産卵したと思われる場所に探索棒がスツと入ったときには、卵が入っていることが多いです。産卵した場所は、満潮時に海水に浸かりやすいため、「カメのゆりかご」へ卵を移設し、ふ化するまでの約60日間は保護施設の監視も

鹿屋市ウミガメ保護監視員

むら た か ず ろ う

村田 和郎 さん

併せて行います。40代の頃から高須小学校でウミガメをふ化させ、海に帰すボランティアとして活動していたことがきっかけで、平成18年から市のウミガメ保護監視員として、活動を続けています。昔と比べると砂浜が減少しており、ウミガメが上陸しても産卵しにくい環境になってきているのではないかと感じています。産卵に適した砂浜を維持していくことが、最も重要なことだと考えています。これからも、多くの人に海洋環境に興味をもってもらえるよう、ウミガメの保護を通じて、自然環境の保全に努め、ウミガメのふる里を守り続けていきたいです。



産卵後、「カメのゆりかご」に卵を移設するときの様子。【右】ふ化し、成体になるのは5千匹に1匹といわれている。【左】